

播磨地方の祭礼行列

藤岡真衣

神社の祭りをたずねると、町や村の中を神輿が担がれて御旅所へ向かう光景を目にする。神輿の渡御が行なわれる祭りは全国各地にあるが、兵庫県の播磨地方には、特定の家筋が決まった役割をつとめ、渡御行列に奉仕するところがみられる。

兵庫県中西部の宍粟市波賀町安賀の波賀八幡神社では、毎年10月21日に近い日曜日に秋季例大祭が行なわれる。ただし、その年の秋の例大祭に神輿渡御を実施するかどうかは、元日の歳旦祭の後の行なう御籤祭で、籤を引いて決めることになっている。毎年必ずしも神輿渡御をみられるとは限らないため、この祭りの渡御行列は地元以外ではあまり知られていない。2019年、3年ぶりに神輿渡御が行なわれ、調査する機会を得たので、ここに紹介したい。

この神輿渡御では、氏子である安賀・今市、上野・水谷、飯見、有賀、斉木の5地区の人びとが、七十五役を分担してつとめる。七十五役は、「一ツ物」と呼ぶ男児、鼻高面をつけた警衛、幟や鉾・太刀、陣ザサラ、少女神子、獅子頭などがあり、それぞれ役をつとめる家が古くから決まっている。

神輿渡御のある年の秋季例大祭では、本殿祭・直会・騎馬隊安全祈願の後、七十五役の安全を祈る大座の式がある。その後、神輿が渡御する御幸祭（出御祭・御旅所祭・還御祭）が行なわれ、「お旅」と呼ばれている。還御祭の後には、神社の境内で子相撲・餅なげがある。なお、渡御のない年は、宵宮祭・本宮祭・子相撲・余興・餅なげを行なう。

出御祭では、御神体が神社の本殿から神輿にうつされる。その後、渡御行列の順に七十五役が読み上げられ、鉾・太刀などの道具が手渡される。この間に神輿が境内に運び出され、全員が揃うと行列が御旅所に向けて出発する。

その順は、神主（道清祓）—箒—国旗—一ツ物—騎馬—幟—馬丁—槍—大傘—雑仕—草履取—幟—錦旗—警衛（鼻高）—大麻—大榊—幟—



波賀八幡神社の神輿渡御

鉾—太刀—唐櫃—奉幣—鉾—弓矢—真榊—陣ザサラ—延綱—少女神子（有元神子・田路神子）—神主（波賀八幡神社宮司）—神輿—少女神子（山田神子・飯見神子）—鞍掛—少女神子（中島神子・森下神子）—太鼓—役員（代表総代・副代表総代・氏子総代・自治会長など）—幟—太刀—鉾—太刀—鉾—太刀—鉾—獅子（頭）—子供神輿である。

御旅所は、神社から約500メートル離れた引原川の川岸にある。御旅所内の神輿台に神輿が安置され、行列に奉仕する人びとが揃うと、御旅所祭が始まる。神輿の前で修祓があった後、祭員が御旅所から川原にある祝詞岩と呼ばれる大きな岩のところまで下りて、御幣を振って場を清める（奉幣の儀）。続いて、宮司が岩の上に立って対岸に向けて矢を放ち（威儀弓の儀）、祝詞を奏上する。宮司が御旅所に戻って神輿の前で神事が行なわれた後、少女神子が一人ずつ神輿に参拝する。その後、玉串の奉奠や直会として御神酒と小餅が参列者に振舞われる。御旅所祭が終わると、再び行列を組んで神社に戻り、還御祭を行なう。

七十五役の中で最も重要な役が一ツ物である。一ツ物は渡御行列を先導する役割で、斉木地区の岡田家本家の親族または岡田家が推薦する童児がつとめることになっている。一ツ物は、



馬に乗った一ツ物

直垂に袴、袖なしの羽織を着て、額には左右に2つの黒点(・)をつける。金色に縁どられた笠を被って馬に乗り、襟の後ろに山鳥の羽と尾花を挿す。祭りの間は地面に足をつけてはならないことにな

っており、特別な存在である。

兵庫県南部の加古川市から赤穂市に至る地域には、祭りに一ツ物・頭人・馬乗り・カゲシなどと呼ばれる子どもが登場することは知られているが、波賀八幡神社の一ツ物は研究者の間でもこれまでほとんど知られていなかった。

また、男児の一ツ物に対して、女兒は神子として神輿に奉仕する。6名の少女神子は、飯見神子・田路神子・有元神子・山田神子・中島神子・森下神子と呼ばれる。神子を出す家は決まっているが、出せない場合は親戚または地区の人に頼むという。神子は化粧をし、着物に紫地の袴をはいて頭上に金の冠を戴く。一ツ物と同様に地面に足をつけず、背負われて移動する。

このほかにも渡御行列には、鼻高面をつけて棒を持った警衛2名や、陣ザサラ（びんざさらのことか。数十枚の短冊型の板の端を紐でつづり合わせた楽器）を首にかけて役2名、獅子頭を手に持つ役1名が参加していることにも注目したい。

神社から御旅所へ向かう神輿渡御の行列の様子



背負われた少女神子



鼻高面をつけた警衛

が描かれた明治25年(1892)の「例祭神輿渡御之図」にも、馬に乗った稚児のほか、鼻高面をつけて棒を持つ人、びんざさらを首にかけた人、二人立ちの獅子舞の姿がみえる。

播磨地方には、鼻高面をつけて鉦を持って舞う王の舞、びんざさらを使って踊る田楽、獅子舞などの芸能を奉納する祭りがある。この王の舞・田楽・獅子舞は、中世の祭礼で演じられた芸能で、現在、福井県若狭地方の春の祭りで奉納されているところも多い。



獅子頭



陣ザサラ

現在、波賀八幡神社の神輿渡御では、鼻高面をつけた警衛や、陣ザサラを首にかけて役、獅子頭を持って歩く役が行列に参加するが、かつては獅子舞が行なわれ、王の舞や田楽といった芸能が奉納されていたのかもしれない。

※本稿の祭礼調査は、2019年10月20日に行なった。御幸祭について御教示くださいました波賀八幡神社宮司の小林盛司氏に心から御礼を申し上げます。

<主な参考文献>

『稚児の祭礼—ヒトツモノをめぐって—』(2006年)、
『播磨の王の舞』(2007年)、『兵庫県の祭り・行事—兵庫県
の祭り・行事調査事業報告書—』(2020年)、
いずれも兵庫県教育委員会発行。

関西大学非常勤講師